

中学部教育課程の概要

「生きて働く力」の育成をめざす中学部の立場

中学部主事 山 里 一 夫

はじめに

本校の校歌の最後の歌詞は、「自分の足で歩こうよ。歩こうよ」である。これが自立である。しかし、よく考えてみると、人手を借りず、自分の足で歩くことは、大変な事なのである。私たちは、お互の手を借り、足を借りて生きているようなもので、社会的他立も実は無視できないのである。

まして、私たちが教育の対象とする子どもたちは、重度化・多様化が話題になる精薄児であってみれば、尚更のことである。

「旅は道ずれ、世は情け」と言う。社会に巣立つ子らは、長い旅路につくののだと思えば、自分の足で確かに立っているつもり自立も、お互に「持ちつ持たれつ」であって、社会自立も裏から見れば、「人間同士が支え合って、好ましい関係を維持している状態」と言うことにならないだろうか。

換言すると、自立には支え合える相手が必要であり、個が「生きて働く力」を発揮するには、社会化（集団化）する中での育成を心がけた実践が重要になると考えるのである。

1. 本校中学部の教育課程編成の基本姿勢

本校中学部では、教科担任制から学級担任制に移行して6年目になる。移行の理由は、対象児の重度・多様化に対処するもので、教科担任制では、学習内容が教科毎に重複することが多くなり、授業の効率を低下させ、自ら学習した事柄を統合して生活化する力の弱い子どもたちに、「生きて働く力」として、社会化していかないからである。

次に、学習計画の核を、生活単元学習に置いていることである。精薄教育の大きな課題は、身辺処理と集団参加（社会参加）の能力を身につけていくことである。そのためには、対象児の発達を的確に把握、生活経験の獲得・拡大・深化する内容を、発達に即して配列し、具体的に目的的な学習の展開が、「生きて働く力」の定着に最も効果的と考えたのである。

以上2点を基本的な立場として、中学部では、小学部の身辺自立の学習を深化し、高等部での職業を中核にした学習への啓発経験的な学習を体験する中で、学習した事項が、友だちや先生たちとのかわりの中で、生きて働く力として定着していくことをめざしている。私たちは、学習内容を説明するとき、教科名を使用しないが、便宜上教科名で示すと、次のようになる。

- | | |
|------------------------|------------------------|
| • 国語 日常会話、日記、作文、劇表現 | • 音楽 合奏、合唱 |
| • 数学 時計、金銭処理 | • 美術 絵画、はり絵、（共同製作） |
| • 社会 公共施設の利用、友だちの中での活動 | • 体育 体力づくり、長きより走 |
| • 理科 動植物の愛護 | • 職業 啓発経験としての農園、木工、陶芸他 |

2. 昭和61年度教育課程編成の特徴

今年度教育課程編成の特徴は、「友だちと一緒に」という集団の中での活動を強化したことである。これは、昨年度各クラス別を実施した「朝の活動」に顕著な効果を認めたからで、しかも、各クラスの実施内容は大同小異で、これなら学部の合同学習として再構成して取り組む方が、効率的だと考えたからである。

右図は、今年度の「朝の活動」を示したものである。指導Ⅰは、学級別指導で、指導Ⅱは、学級別の養訓的な指導と合唱奏や劇活動による指導が中心となる。指導Ⅲは、合同による体力づくりで、今年度は、かけ足運動に重点をおいてきた。

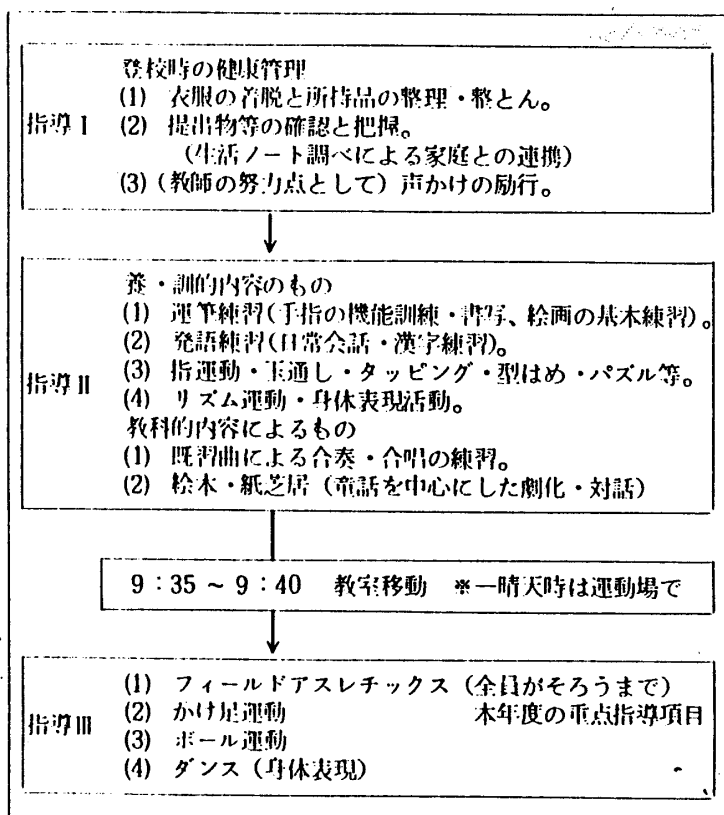
3. 研究主題と中学部の取り組み

子どもの発達や障害を的確に把えることが、研究活動の出発である。そこで、子どもの問題点を追求していくと、短所は必ずしも問題点ではなく、子どものもつ障害でさえ、個を形成している要素であることに気付くのである。

私たちは研究との取り組みの中で、子どもの問題点や障害の除去・改善ばかりしていると、「個を形成する個性的なものまで見失う結果になる」と気付き、それでは到底生きて働く力の育成は望めないし、指導のきっかけすらつかめなくなると思ったのである。

そこで中学部では、本校の教育課程（段階別教育内容表）の3段階の経験内容を中心に、ひとりひとりについて、個が何を獲得し、改善し、深化してきたかを、的確におさえるよう努めてきた。その上で、個に何を期待し、どう指導するか、問題を焦点化して、実践研究と取り組んできた。

また、実践研究の評価は、学校の中で、どう「生きて働く力」となっているかを観点に、次の指導の足がかりにするよう努めてきた。（別添、中学部資料参照）



4. 中学部の実践研究に対する来年度への課題

実践研究の中で、2つの問題を残したと思う。ひとつは、子どもの発達の過程で、個にとって、最重要課題に取り組んできたかどうかという疑問である。例えば、ことばではもっと日常会話での追求が計画されるべきではないかと反省している。

もうひとつは、保護者との連携の強化である。教師の努力も家庭での生活とかみ合わなかったり、保護者の気持ちが、学校に伝わらないようでは、指導効率も半減する。来年度は、一層家庭と学校との具体的なかかわりを強化して、発達と障害に応じた教育の実践研究と取り組んでいかねばと考えるのである。